

#### (4)、尖閣に “沖縄石油立県”を 夢見た男

##### 無から有を生み出す 地下資源こそ 貧しき沖縄の救世主

この東シナ海海底油田を語る時、もう一人の男に触れなければならない。新野と同様に、この油田の存在を言い当てた大見謝恒寿である。

彼は、地質学者でも石油専門家でもない。地下資源の知識がない男だった。

1946年(昭和21)、太平洋戦争敗戦の翌年、18歳で、大阪から古里沖縄へ引揚げてきた。初めて見る古里は戦禍で荒れ果てていた。その惨状に驚いた。この貧しき沖縄を救う方法はないかと心を痛めたが、非力な彼には、なす術はなかった。

帰郷後、一家の柱として、米軍雇用員として旋盤工やメスホールに働いていた。

そこで、仕事仲間からリン鉱石や石炭、銅山開発が隆盛していた頃の話を目にし、地下資源に興味を引かれた。

彼のいた大阪此花にはラサ工業があった。

ラサ工業は恒藤規隆博士が設立し、沖縄の大東島ラサ島(沖の大東島)からリン鉱石を採掘して、これで肥料製造する大きな会社だった。恒藤は、古賀辰四郎に招かれ、尖閣諸島のグアノ(鳥糞)調査も試みている。

このラサ工業には、沖縄の人も多く雇用されていた。彼は、ラサ工業の見聞もあり、地下資源こそが、“無から有を生み出す”ことができると考えた。熱血漢の血が騒いだ。

自分も金銀銅山を発見し、開発してみたい。この地下資源があれば、貧しい沖縄を豊かにできるはずだと確信した。

20歳の時。己の使命は「地下資源を見つけ、沖縄の復興再建に貢献する」と決心し、金銀、銅山の鉱物資源探しに手を染める。だが、地質や岩石の知識もなはずの素人だけに、調査方法が知らない。

彼は、過去に鉱物採掘した鉱山跡を見て回ることにした。

本島北部や慶良間島の銅鉱山跡、久米島の金山跡などに赴き調査していたが、沖縄の鉱山経営がことごとく失敗に帰したことを知った。

彼は鉱物資源調査から、他に転換せざるを得なかった。

ある日、米軍基地内で地下取水ボーリングした際に、水と一緒に天然ガスが噴出した話を聞き、驚いた。沖縄の古い書物「遺老説伝」にも燃える土のことが記録されている、天然ガスが噴き出す不思議な土地の伝説である。

この天然ガスの噴出地域は、本島中南部に広がるクチャと呼ばれる泥岩や砂岩あることが分かった。那覇や首里の街もこのクチャ島尻層の上にあった。



大見謝 恒寿

天然ガス調査となると、ますます地質、地層について勉強しなければならない。

## 教科書などで独学 “新生代第三紀 日本石油時代” 知る

1950年代の沖縄では、大見謝が、どんなに勉強したくても、地質関係の本は手に入らなかった。学校の理科教科書などに頼らざるを得なかった。

彼は、高校の地学教科書から、「天然ガスは、新生代第三紀層の中に水と共存して産することが多く、成因から石油に関係しているものもある」、また「油田地帯には石油天然ガスが発生している所がある」などの知識を得た。

沖縄の天然ガスが噴き出す泥岩クチャは、第三紀の地層であると知った。

第三紀地質時代は、百万～6千万年前で、これまで大陸と陸続だったが地殻変動を起こして日本列島が形成され、沈降したところに海成層が堆積した。

海成層は、古い地質時代の生物遺骸などの有機物が海中に沈殿・堆積してできたもので、天然ガスや石油は、この海成層が地圧や地熱で分解されて生成されるとしていた。日本の石油は、この第三紀の海成層に、含油層の中に含まれており、“第三紀は日本の石油時代”であるとしていた。

大見謝は、本島中南部に大きく広がる泥岩クチャの丘にひとりたたずんでいた。青土色帯びた破片を手に取り、ルーペを取り出し仔細に観察した。

有孔虫や珊瑚虫の遺骸からなるクチャは、気のせいかな、ねっとりした油様感がした。やはり、この島尻層クチャは、海中に堆積した海成層、石油母岩の含油層だ。ならば、沖縄にも、天然ガスだけでない、石油もあるかも知れない。

八重山西表には石炭が豊富にある。この石炭も同じ第三紀海成層の仲間か？

彼は地質にずぶの素人だけに、既成の理論に囚われず、自由奔放に発想した。

天然ガスも、石油も、石炭も、有機物が地中で分解されてできた同じ仲間だ。

物体に、圧力や熱を加えていけば、分解されて、固体から液体、液体から気体へと変化していく。地圧の強さや地熱の温度の違いによって、固体の石炭や液体の石油、気体の天然ガスができたりしているに違いない。

だとしたら、天然ガス、石炭がある地層には、必ず石油もあるはずだ。

この第三紀海成層が分布している地域を探せば、石油が地表には滲み出しているのが見つかるかも知れない。

彼特有の、我流の考えで以て、沖縄各地を飛び回り、ガス噴出や油兆の発見に奔走した。

## なぜに 絶海の孤島尖閣諸島に 石油母岩第三紀層 あるか？

大見謝の地質調査は、素人だけに困難を極めた。しかも自分の足で広大な地域を1つ1つ見て回らねばならない。山野を分け入り、草の根分けて、崖に這い上り、岩を割り砕いて、土砂岩石を調べる。それだけに莫大な時間と労力を要していた。ほどなく転機が訪れた。1955年、琉球政府が地質・鉱床の手引書「琉球列島の地形・地質及び鉱床」を発刊した。同書は琉球列島の地史や地層を解説した沖縄初の地質の専門書だった。簡略な地質図まで添付していた。

東北帝大地質学教室の半沢正四郎博士の論文「Topography and Geology of The Ryukiu Islands」等をもとに現地調査報告も加えて、まとめたものだった。

彼はこの本を入手して、石油母岩とみなした第三紀層は、本島中南部から、宮古、石垣、西表から与那国、遠く台湾北部まで広く分布していることを知った。

大陸と地続きだったことを考えれば、これら島々の第三紀層は一連のものと思えた。台湾北部新竹では、石炭も出土し、油田開発もされている。

地続きだった与那国、八重山からも石油が出るに違いないと意を強くしていた。「尖閣諸島の地理及び地質」の項目があった。一読して衝撃を受けた。

・・・列島中最大の島は魚釣島で・・・島の大部分は第三紀層で・・・厚さ約 10 cm くらいの石炭の薄層がその最下部に挟在している・・・

(「琉球列島の地形・地質及び鉱床」琉球政府経済局 1955年)

黒岩恒の調査に基づいたものだった。

なぜに、東シナ海の絶海の孤島尖閣諸島にまで、第三紀の海成層が、しかも石炭層があるのか。

彼はこの一文に釘付けになり、大きな疑問に囚われた。



魚釣島の石炭層 なぜ絶海の孤島にある？  
(新垣秀雄 1952)

## 東シナ海大油田 莫大な埋蔵 琉球列島のガス田 こぼれた分

1952年植物学者多和田真淳は、高良鉄夫博士が主導した琉球大学。琉球政府資源局合同調査団員で尖閣諸島を調査していた。

彼は多和田を訪ねて、驚くべき体験を聞かされた。

・・上陸三日目に東側断崖を命がけでよじ登り山を横断した時の発見で、二千坪以上にまたがり地中から噴出し、大木はさかさまになり、全て根元を上にして黒焦げに焼け、油ぎっていたことである。筆者を・・石油資源につながるものだと判断し、O・I・S・K 等の人たちに調査をすすめた。これが導火線となって、近來にない尖閣石油資源旋風を巻き起こそうとは・・。

(おち穂「尖閣石油資源の発見」多和田真淳 琉球新報 1969.10.09)

多和田が記したイニシャルのOは、大見謝のことである。

多和田の話を聞きながら、彼の頭に衝撃が走った。海底油田が噴き出して爆発したかもしれない。なぜ、ちっぽけな尖閣の島の海底に油田があるのか？

爆発は二千坪以上にまたがっている。

ならば、大油田が存在するのか？



多和田 真淳

大見謝は、東シナ海の家図を前にして、急ぎ頭の中を整理することにした。

だが、彼の限られた知識では、解決の鍵を見つけるのは難しかった。

無名の彼に、海底地質学者新野弘博士も、論文も、知る由も、術もなかった。

他方、宮城新昌は沖縄に居た。彼の東シナ海の大栽培漁業基地構想についての程度関心があり、知識があつたかは知らない。

ともあれ、大見謝が考えた末の結論は、新野・宮城とほぼ同様である。

所謂、“中国大陸栄養給源地”とした考えだった。即ち、中国大陸から、広大な東シナ海へ流入した膨大な滋栄養分は、海洋生物の食べ物として摂取され、これら生物の遺骸と一緒に、海中深く沈殿していった。これらが幾千万年にわたり海底深く堆積し、膨大な厚さの石油母岩の海成層をなしている。

彼は、この一部が石炭層となり、魚釣島の地表に露出したと考えた。

また、大陸棚からこぼれた分が琉球列島のガス田、石炭層を形成している。

これに比べると、東シナ海の家底油田は莫大な埋蔵量に違いない。

だが、油田開発となると、彼の乏しい知識では、陸上に高いやぐらを組み鑿井している採油光景しか浮かばない。海底油田開発は想像できなかつた。

東シナ海に大油田が眠っているとしたら、如何にして開発すればいいか。

そんな思いを抱きながら、沖縄本島から宮古、八重山の山野や海岸をかけずり廻り、ひたすら油徴探しに奔走していた。

## 山下太郎、アラビア湾で、海底大油田を掘り当てる。

1960年1月、突如、劇的なニュースに日本中が沸いた。

日本の石油業界に大光明を投じるビッグなニュースだった。

アラビア湾において、山下太郎が海底油田開発に成功したとの大朗報だった。

山下は、欧米の大石油会社との熾烈な競争を勝ち抜いて、見事、石油利権獲得し、石油試掘に入るや、短期間のうちに、世界的有数な油田を掘り当てた。

しかも、1回の試掘で、世界的海底大油田をしとめたというものだった。

この大成功は、敗戦後の暗さを吹き飛ばす大朗報として大喝采を浴びた。

その朗報に、大見謝も、大衝撃を受けた。山下太郎という男が、遠いアラビアの異国の海において、海底大油田を掘り当てたというニュースに震えるほどに感銘した。

第1本目の井戸で、カフジ油田での試掘に見事成功、しかも世界第一級の井戸を掘り当てたのは奇蹟的だった。井戸1本の生産量は日産1千キロリットルで、日本中の油井3,500本に匹敵し得る分量だった。

その後も、次々と新しい井戸を掘り当て、生産量は上げていった。

翌61年の生産量は113万キロリットル、次いで351万、762万キロリットルと増加していった。64年には、油井は50抗となり、1000万キロリットルを越えた。

これは日本の原油総輸入量の7分の1に相当するものだった。



1961年4月、アラビア石油カフジ油田で、日本への第一船積み出し祝賀式典にのぞむ山下太郎。日の丸原油確保という壮大な夢が実現した日だった。(産経新聞撮影)

山下は、山師やハッター屋との世間の冷笑や悪罵にも耐えた末に、成功を勝ちえた。大見謝は、自分が取り組んでいる油田探しは、夢物語でないと勇気づけられた。努力すれば、山下のように、必ずや実現できると奮い立った。

山下のアラビア湾での海底油田開発の成功、貴重な情報源ともなった。

彼は、熱心に情報収集した。油脈調査は、地震探査や掘削ボーリングは最先端技術を有する米国の探査業者によって実施されたこと。油田は水深 30 メートルの海底にあり、掘削深度 1,650 メートルから、石油は噴き出した等々、様々な情報を得た。

山下のアラビア湾における石油開発利権の獲得競争から開発に至る経緯は、貴重な示唆を与えた。海外石油開発は、「石油利権協定」という国際慣行に基いて実施され、サウジアラビアやクウェートなど中東産油国は、「石油開発利権」「鉱区権（鉱業権）」など諸権利を設定して、山下やメジヤなど外国石油開発会社に対して、自国に有利な条件で、開発を請け負わせていた。

彼は、海外での石油開発の実態—石油開発会社と産油国が締結する「石油利権協定」に関心を持ち情報収集に努めた。

1967 年 6 月、山下は劇的な成功から 7 年を待たずして 78 歳で逝去した。

大見謝は、早逝に驚き、深く哀惜した。後年、窮地に立つと時折、口癖のように言った。「もしも、山下さんが生きていたならば、尖閣油田開発に理解を示し、きっと協力してくれただろう」と。彼にとって、山下は、尊敬すべき海底油田開発のパイオニアであり、己の志を理解してくれる心の師でもあった。

## 竹富島に ボーリング機械持ち込み、自力で 石油試掘

大見謝は、アラビア太郎の山下から多くのことを学んでいた。

とりわけ、石油開発業界で、国際慣行となっている「石油利権協定」は、目のうろこが落ちるほど有益な情報だった。地元沖縄側に開発資金がなくても、同協定に則って、石油会社が開発を請け負わせて、沖縄の石油資源開発は可能だと知った。これに百万の援軍を得て安堵した思いであった。沖縄石油立県を実現して豊かにすることも夢でない。そのためには、「沖縄の石油資源の鉱業権は、沖縄の利益を守るために、沖縄自らで、確保しなければならない」と肝に銘じた。

では、石油開発するには、如何すればいいか。困惑せざるを得なかった。

山下は、満州太郎の異名をとり、満州で大成功し、巨万の富を有する実業家で、名だたる財界人だ。それに比し、自分は何の力も金もない一介の商店主だ。

そんな自分が、あの宮古八重山の島々に、絶海の孤島尖閣諸島の海底に、油田があることを説明しても、誰一人信じる者はいないだろう。



石油開発の専門家でも同じだ。こんなバカなど、一笑し、変人扱いにするだけだ。大見謝は、一策を講じることにした。

八重山竹富島沖合の海底に天然ガスが自噴している。

水溶性油脂が浮いて海面が黒づんで見える。エチレンを含んだ石油系天然ガス噴出の海域はの表面温度は 29℃、海面水温は 46℃と高く、石油成因の根源となるアストロファイザ類一有孔虫の残体が同島周辺に無尽蔵には発見されることも油田の存在を示唆している。

(「尖閣油田開発の真相」 大見謝恒寿 1970.5.1)より

ここで、一発当てて、石油を噴出させれば、誰もが驚き、こぞって開発契約を申し出てくるだろう。

1963年、大見謝は、手始めに八重山竹富島と周辺海域の石油鉱業権を申請取得した。翌64年4月には、琉球政府から石炭探鉱用ボーリング機械を借り受けた。

これを竹富島に持ち込み、自力で、島の真ん中にやぐらを組み、石油ボーリングを試みた。が、深度100メートルの試掘に止まった。石油は出なかったが、得られたコアに油様感があった。

もしも、千メートル深度掘削できるなら、アラビア太郎のように石油は間違いなく噴出させてみせると息巻いていた。

当時米軍施政権下にあり、米国民政府(USCAR)に、この調査結果を報告し、資金援助をお願いしたが反応はなかった。

彼の申請書類を見ると、竹富島沖油田の存在を確信し、最深度の試掘に意欲満々である。

だが、本命にしていたのは、広大な東シナ海に眠る尖閣油田だった。



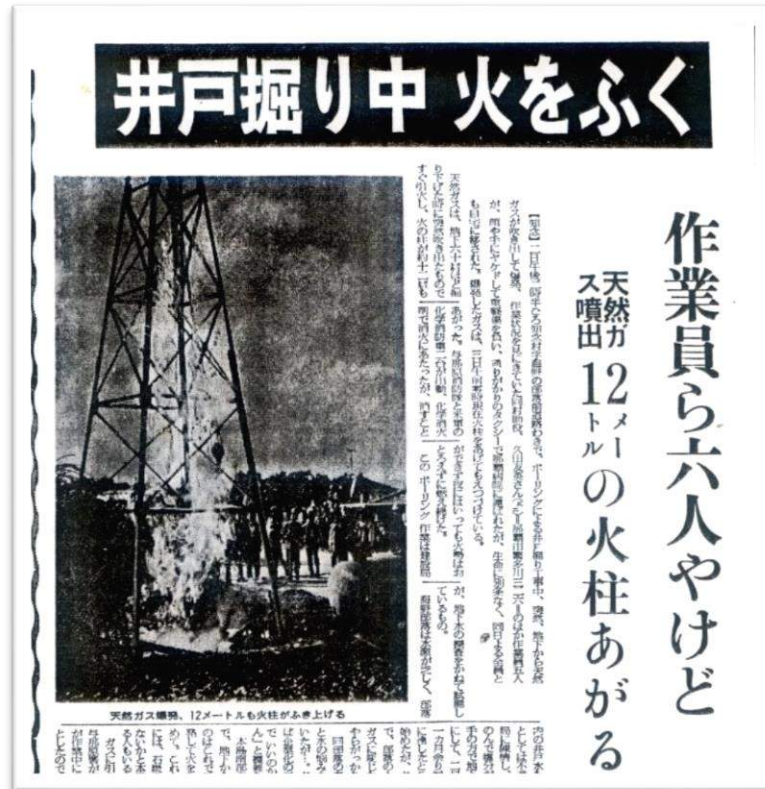
八重山竹富島沖の石油ガス噴出箇所  
(大見謝恒寿撮影)

## 天然ガス爆発事故、契機に、急転直下 表舞台に

1966年3月2日午後2時頃、沖縄本島南部知念村で、琉球政府建設局がボーリングによる井戸掘り工事中、突然地下から天然ガスが噴き出して爆発、作業員ら6名がヤケドして、重軽傷を負うという爆発事故が起きた。

・天然ガスは、地下六十メートルほど掘り下げた時に突然吹き出したもので、す

ぐ引火しく火柱が十二メートルもあがった。与那原消防隊と米軍の化学消防車二台が出動、化学消火剤で消火にあたったが、消すことができず夜に入っても火勢はおとろえずに燃え続けた…。(琉球新報 1966.3.3)



天然ガス爆発事故を報じる新聞 (琉球新報 1966.3.3)

大見謝は、爆発事故から数日後の新聞を見て、驚いた。

この時に、彼は、新野弘博士の存在を知ったのでは？ さらに驚いたのは、新野が、「東シナ海油田は、国際的にも注目されており、沖縄側も調査開発を急げ」と話していることだった。

### 東支那海に油田ある証拠、沖縄側も調査急げ

#### 水産大の新野教授 知念の天然ガスで語る

●海底資源研究の権威、東京水産大学の新野弘教授は、「ガスが埋蔵されていたことは予想されていた。これは東支那海に油田がある証拠である」と語った。●海底の石油、また天然ガス田は大陸棚の第三紀層にあるが、この地層は九州西方沖縄など東支那海の深さ百メートル前後の海底のあちこちにあらわれていることが確認され、東支那海に大規模な石油資源があることはほぼ確実だといひ、三日東京で日本工業クラブの財界人に「早急に調査するよう」訴えた。●調査活動を急ぐ理由として、最近西ドイツは台湾の関係筋に海底油



田調査船「メデオール号」の提供を申し入れ、また台湾では石油開発を行っている英スタンダード、米ユニオン両石油会社もこの調査への財政援助を通じて、東シナ海進出のかまえをみせていることにある。「開発されると沖縄が日本の基地となるから沖縄ももっと積極的に考えてほしい」と希望している。

(琉球新報 1966.3.7)

新野の発言を裏付けるかように、東シナ海油田をめぐる動きは進展しているようだった。大見謝は、自分が知らないうちに、沖縄よりの東シナ海と竹富島沖の油田の問題が国会でも取り上げられたという報道に、さらに驚かされた。

油田層 国際的利権が暗躍 米国から調査申し入れ

国会でも取り上げる 琉球政府も近く調査

【東京総局】最近、専門家による調査で、沖縄よりの東シナ海と八重山・竹富島沖に大油田層があるとの見方が強まり、さる二十一日国会でも問題が取り上げられたが、新野弘教授のもとに、米国の石油会社から問い合わせがあるなど、この未知の油田をめぐる、早くも国際的利権が暗躍しているようだ。沖縄の業者も個人的に竹富島近海のガス噴出地域を調査しているほか、琉球政府も近く調査を行う考えであるが、なりゆきによっては複雑化しそうである。

新野教授はつぎのように語った。一、米国の某石油関係者が「共同調査」を申し入れてきたが、いま会社名を明らかにするわけにはいかない。米国の石油会社は米軍とのつながりが強く、さらに積極的に申し入れてこよう。

一、米国では別の会社も動いており、インドネシアで石油採掘をしている某社もたまたま来日中に国会でのやりとりを知り、私を呼んだ。この会社は沖縄の島尻層や近海のことにはよく調べている。

一、日本政府はまだしつかりした考え、計画を持っていないと思うが、通産省地質調査所に海底調査部ぐらいはもうけて、研究する必要があるだろう。琉球政府も本格的に対策を考えていいのではないか。

(琉球新報 1966.7.24)

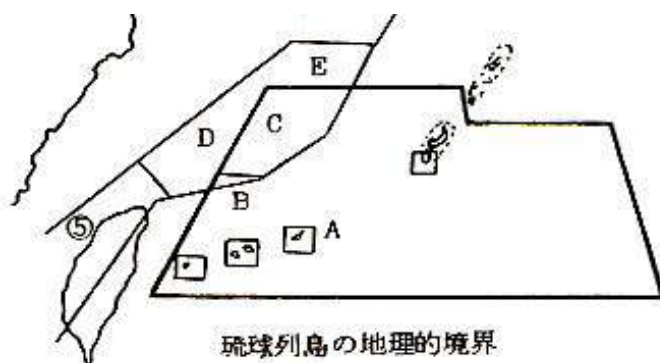
## 沖縄よりの東シナ海、尖閣油田鉱業権 確保へ動く

竹富島沖や東シナ海油田をめぐる、外国石油会社が動いているとすれば、安穩としてはいられなかった。沖縄の石油資源の鉱業権は、沖縄の利益を守るために、沖縄自らで、確保しなければならない。

大見謝は、急ぎ鉱業権申請準備に着手することにした。尖閣油田は、広大な面積であり、件数も一万件ほどになると思われ、この図面作成、さらに貼付する印紙、申請手数料だけでも巨額な金額になる。ざっと見て、作業量、資金の工面もあり数年は要した。

彼は、「尖閣油田開発の真相」にこの時の状況を記している。

「私は同油田の開発に乗り出すため、1963年、八重山の竹富島を皮切りに尖閣列島海域にまで及ぶ石油鉱業権の設定に着手することにした…全体を5つの区域に分け、手初めに沖縄の3カイリ内の領海領域等(AB地区)へ…漸次その枠を領海外の大陸棚地域(CDE地区)に拡大して行く順序で計画を組んでみた。…66年迄に…AB地区への申請作業はほぼ完了…C、D地区への申請図面等の準備は既に整えていた…1968年、エカフエのCCOPの発表により一躍、尖閣油田が脚光をあびる。…C地区及び…D地区への申請にとりかかった。」



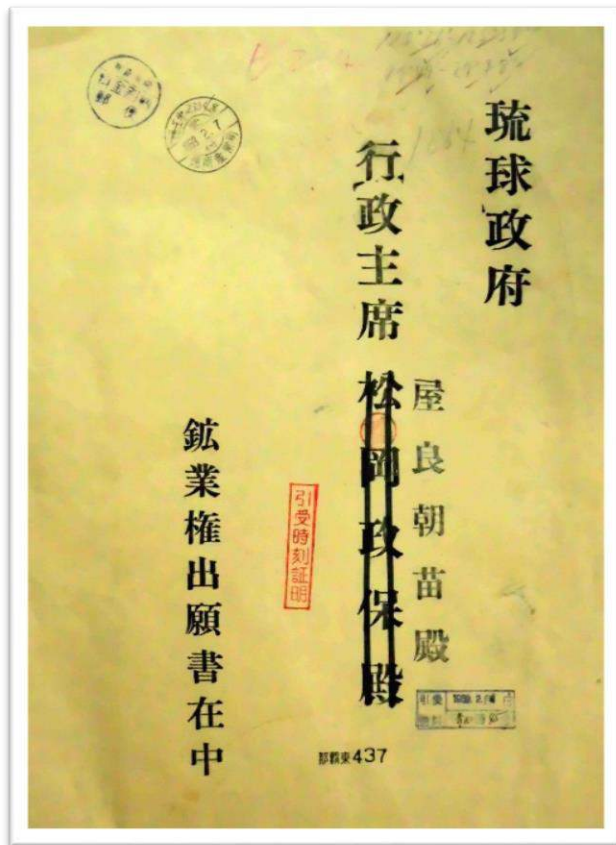
琉球列島の地理的境界

A	1963~66年大見謝恒寿石油試掘権出願，受理済一部許可
B	1966年，同人石油試掘権出願，受理済(309件)
C	1969年2月，同人石油探掘権出願(5,219件)
D, E	石油公団事業本部，新里景一氏出願鉱区。

前出(「尖閣油田開発の真相」)より

後段について、付言すると、この準備の最中の「1968年、エカフエのCCOPの発表により一躍、尖閣油田が脚光をあびる…」(前同)。

突然のエカフエの発表に、世界の石油業界は驚いた。彼は、取り急ぎB地区、C地区(米国統治下での琉球列島の地理的境界内)へ申請に踏み切った。



通商産業局受付No. : 2334 号  
受付年月日 : 1969.2.7



那覇東郵便局引受No. : 437  
引受年月日 : 1969.2.4  
引受時刻 : 午前 10 時 45 分

大見謝はエカフェ報告を受け、66～67年頃から準備していた尖閣油田B・C地区の出願書の琉球政府行政主席宛名を松岡政保から屋良朝苗に書き換えて、石油鉱業権を急ぎ出願した。鉱業権は先願主義である。そのため、出願封書の左上に通商産業局受付No.と日付、真下に那覇東郵便局引受No.と時刻が捺印されている。この書類は、不備があり差し戻されたものである。

## 巨額の金投じ、尖閣油田鉱業権 5千余件 一括申請

尖閣列島は宝庫 大見謝さん”石油王”に執念

十数万ドルかけ 鉱業権を申請

「『尖閣列島に膨大な地下資源が分布している』という話は巷間で話題になっているが“一攫千金”の夢をたくして同列島一帯の鉱業権を一手に握ろうと政府に申請、巨額の金を投じている執念の人がいる。十数年前から西表などに石油資源があるとみて、調査研究に身を投じている大見謝恒寿氏だが、五日通産局工業課に五千五百二十件もの鉱業権出願書を申請、職員をびっくりさせている。

同申請書には一件当たり二十ドルの印紙がいるほか、それぞれ地図などが添えてあるため、費用だけでも十数万ドルかけている。同氏は、前にも三百件の試掘権を申請している。 “沖縄版石油王”といった意気込み。どっと申請書類が

山積みされて目を丸くしているのが工業課職員。・・また同課には二人の係しかおらず、せいぜい調査などして一年に五、六十件しか処理できないという。書類の置き場でさえ頭を痛めるほどだけに・・いずれにしても『尖閣列島は石油か』・・と恰好の話題ではある。」（琉球新報 1969.2.6）



“掘ると決めたらどこまでも”と報じる。(「琉球新報 1969.年 2 月 6 日」)

大見謝は、米軍雇用の仕事を辞めた後は、那覇で洋品雑貨や土産品店を営み、繁盛していた。が、仕事もそっちのけ、店の利益は調査につき込み、石油探しに夢中になっていた。このため周囲から気違い扱いされ、「石油のオーミジャ」と呼ばれていた。

この申請を境に、「石油のオーミジャ」は、「尖閣のオーミジャ」に呼び変わった。また、彼は、尖閣油田開発に専念するため、山下の中東アラビア石油にちなみ、ペルシャ湾の名称を付けて、「ペルシャ資源開発」を設立した。

以後、石油関係者は、彼を「ペルシャ資源のオーミジャ」と呼んだ。

ともあれ、大見謝の一括申請に、慌てたのは国内の大手石油資本だった。

ここに、尖閣油田をめぐる地元沖縄側（大見謝）と大手石油資本（石油公団：古堅と九州石油開発：新里）の3つ巴の争いが生じた。



新聞は、連日「眠れる海底油田争奪戦」として紙面を賑わした。

この国内のいざこざに乗じて、台湾は、国際石油資本ガルフ社に鉱区の探査権を貸し与えた。中国にも、みすみす領有権主張の隙を与える結果となった。

## ”兆ドル”油田なら 沖縄石油立県も 夢でない

大見謝は、「尖閣油田開発の真相」のなかで、ニューズウィーク誌は、東シナ海・黄海の海底油田を「”兆ドル以上”と云う高い評価を下し・・・現在の沖縄の予算額約二億ドルの五千年分、本土国家予算額約二百二二億ドルの約四十年分の莫大な額にのぼることになり、・・・尖閣油田の開発が地元沖縄住民にもたらす恩恵は、これまでの経済メリットの常識を遥かに越える程の膨大なものである・・・」とし、尖閣が”兆ドル”油田ならば、沖縄石油立県は夢でない。沖縄に限りない繁栄をもたらす千載一遇のチャンスだと訴えた。

だが、沖縄は金はないわけだから、石油開発なんてできるわけないと言った。これに対し、彼は、山下のアラビア石油などの海外事例を説明した。

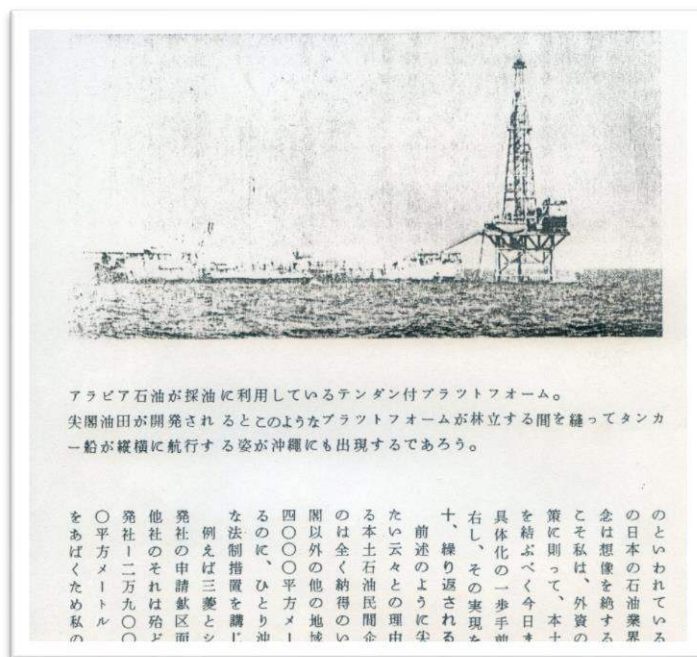
石油開発業界において、国際慣例として、石油利権協定の取り決めに基づいて開発はなされる。その際、地元側が石油鉱業権を有していたら、資金がなくても、石油会社に開発を請負わせて、成功したら、原油か、利益の一部をもらう。

失敗しても、地元側には、一切の負担はない。

彼は、尖閣油田も、この石油利権協定に基いて開発すると積りだ。肝心なことは、尖閣油田の石油鉱業権を地元側が有しているか、否かだ。だからこそ、地元側で守られなければならない。

幸いに尖閣油田の中枢部の鉱業権は、地元住民側に属している。

今こそ同油田の価値の重大性を認識し、住民一丸となって、この権益の地元



大見謝の小冊子には、実現の暁には、尖閣海域にもこのような光景が出現するとして、アラビア石油の写真を掲載していた。山下への熱い心酔ぶりが伺える。（「尖閣油田開発の真相」）

側による確保と、利権協定による沖縄サイドの開発に立ち上がるべきである。・・

尖閣油田の開発は将来の沖縄の経済、更には日本全体の経済構造を根底から覆す程の重大なものである。従って、その問題の処理はこれまでのように単なる一部の人の思惑や、あるいは政治的裏面工作等に左右される性質のものでもない。然もそれは、沖縄住民全体の唯一最大の共有財産となるべきものであり、当然、住民に還元されるべきものである。同油田は沖縄の「史上最大の住民生活の向上と福祉等をもたらす金の卵でもある。」

そのため、火急の策として、琉球政府の主体ある方策の樹立とこの問題に対する住民の新たなる認識と奮起が望まれる。

前出「尖閣油田開発の真相」

## 島ぐるみ「守る」運動へ 琉球政府“尖閣 KK”構想 打ち出す

1970年8月地元石垣市で「石油資源を守る会」が結成され、「鉱業権を死守し、沖縄経済振興の柱」とアピールし、地元沖縄側に権利をと、運動が沸き起こった。

たちまち、沖縄本島に飛び火して、46団体が参加した組織になり、島ぐるみの守る運動に発展していった。”尖閣油田は沖縄の宝だ”“自らで開発し、沖縄石油立県を実現しよう”のかけ声が夜空にこだました。

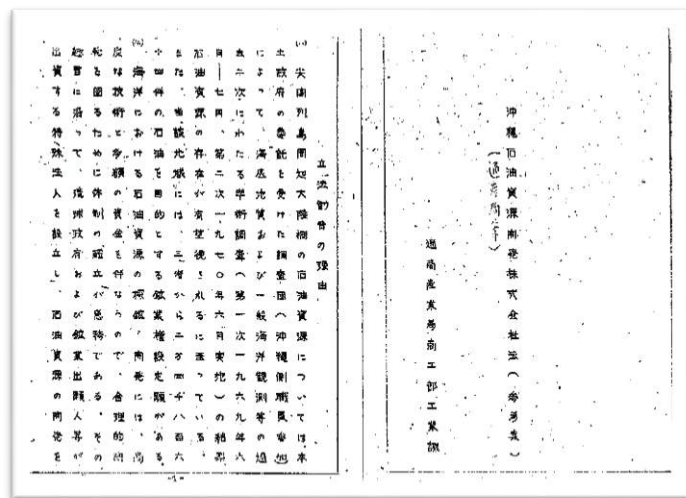
琉球政府通産局砂川恵勝局長も、「尖閣石油資源開発 KK」を設立し、大見謝ら鉱業権者に参加を求め、県が主体となった尖閣油田開発を推進するとした。



・・通産局は、尖閣列島の海底石油資源を県益第一主義の方向で開発して行くため、沖縄石油株式会社法案を3月1日に立法勧告する準備を進めている。・・すでに同会社法案を作成し、・・立法院に送付する予定・・。

(琉球新報 1971.02.05 「県益第一主義で開発 KK 法案立法勧告」)

砂川は資源開発 KK 設立に、大きな期待をかけていた。



「尖閣資源開発 KK」設立に尽力した砂川恵勝通産局と「沖縄石油資源開発 KK 法」(参考案)



同 KK 法一参考案を見ると、質問：「海洋における石油資源の探鉱・開発には高度な技術と多額な資金を伴うが、その対策案はどうなっているか？」に対して、答：「琉球政府及び民間出資による特殊法人を設立し、開発体制を確立する。石油資源の探鉱・開発には国及び民間企業に協力を要請するが、その規模については、設立後決定する」としていた。

1 年先には日本復帰・世替わりを迎える。琉球政府は解体され、また開発 KK は国へ移管されることから、所管となる本土政府の対応に期待するしかなかった。

が、終局には、「守る会」の運動と、琉球政府の「石油開発 KK」構想は、復帰を目前にして頓挫した。その原因の 1 つに、中国が尖閣領有権を主張し出したことにあった。これにより日本政府は消極姿勢に転じ、国内石油業者も尻込みせざるをえなかった。後世に大きな禍根を残すことになった。

もしも、琉球政府によって「尖閣石油資源開発 KK」が設立され、日本政府も積極的に支援し、何らかのアクションが為されていたならば、尖閣問題は、今日の如き最悪な状況に陥らなかったかも知れない。

### うるま資源 KK 発足 嘆願すれども 日本政府 試掘許可与えず

1972 年 (昭和 47 年) 日本復帰後は、地元沖縄側は、投げだされた形となった。だが、大見謝はへこたれなかった。

業界関係者を訪問し、粘り強く尖閣油田開発を要請続けた。

73 年 10 月、うるま資源開発 KK(脇坂資本金 5 億円東京在)が発足した。



うるま資源 KK 設立パーティーで、祝福を受ける大見謝恒寿(右)。中山素平日本エネルギー推進委員長(左)、辻良雄東洋石油社長(中央)。(大見謝恒寿 1973)

東洋石油開発 KK（辻良雄社長）を中心に、三和銀行を筆頭に、日商岩井、マルゼン、日綿、東急など錚々たるメンバで構成された東シナ海油田開発を目的とした会社だった。

待ち望んでいた尖閣油田の開発は、愈々実現に向けた第一歩を踏み出した。

だが、政府は、大見謝が申請した鉱業権を許可しようとしなかった。

彼は業を煮やし、政治家や政府関係者に対し、早期の試掘許可を訴えた。

政府の態度は頑なだった。大陸棚に対して隣国との問題あるなら、尖閣諸島の領海 3 海里（当時）は、日本領土であることは明白だ。この水域だけでも許可してほしいと嘆願した。なぜか、この要請さえも拒否された。

中国側は、中間線内側で、ガス田開発をどん欲に進めていた。

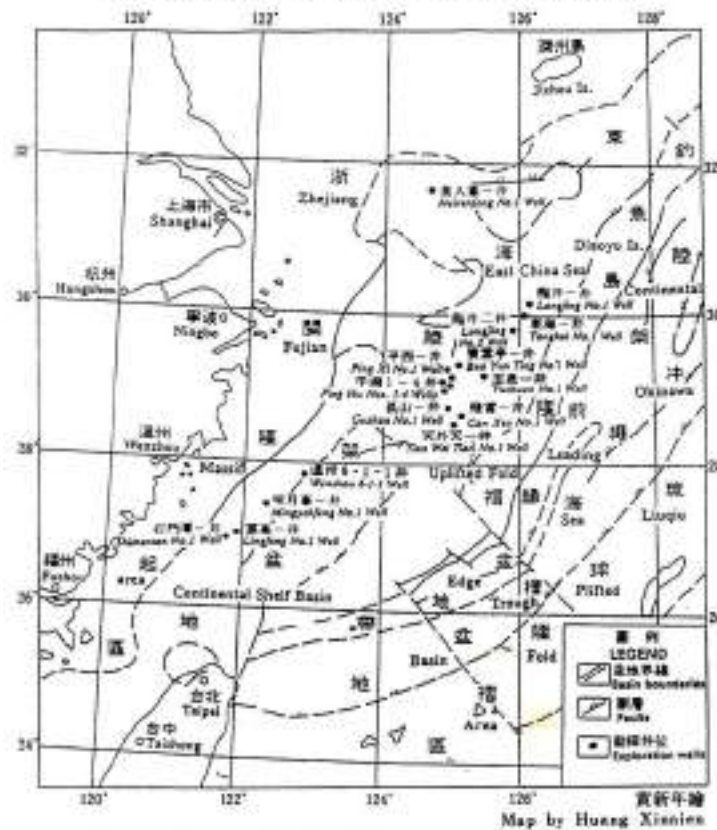
1980 年代に実施されただけでも、悠に 10 数件を超えていた。

情けないのは日本政府である。これでは、中国に全く腰砕けではないか。

大見謝らうるま資源 KK の尖閣油田開発は見通しもつかない。

歳月だけが、空しく過ぎ去っていった。

10. 東シナ海における中国の石油探査・試掘状況



出典：顧宗平「東海油気回廊和視望」『中国石油』第22期（1989年）8頁。

（「中国の海洋戦略」平松茂雄 1993.6）

## 道半ば 急逝する 今なお 尖閣油田 放置のまま

1986年12月、突如、大見謝は亡くなった。

開発の実現を見ぬまま、享年58歳で急逝した。

彼の死は新聞で小さく報じられ、人々は「尖閣のオーミジャ」が道半ばで亡くなったのに驚き、その死を悼んだ。

彼の死後も、日本政府の方針は変わらず、開発は棚上げされたままだった。

人々の記憶から、尖閣に、沖縄石油立県を夢見ていた「尖閣のオーミジャ」は、次第に忘れ去られていった。

うるま資源開発KKは、試掘許可はもらえず、立ち往生したままだった。

先日私の事務所に思いがけぬ人物が尋ねてきた。大学時代一年後輩・・荒木正雄氏で・・今は東洋石油開発とウルマ資源開発の社長をしているという。

「実は私の会社は海底油田の採掘権をもっていますね・・いろいろ考えてみましたがあその海底油田はどうも結局中国と早期に共同開発する以外に手はないような気がします」

「それはおかしいんじゃないか。自分の家の庭に出る水を汲む井戸を、なんで隣の金も技術もない相手と組んで掘らなきゃならないんだ」

「しかし、こっち側の家の主人の腰がひけているんでねえ。交渉が交渉になりませんよ。不本意な話ですが」

肩をすくめていう彼の心中は痛いようにわかったが。

(「尖閣諸島 あの島を失うまい」石原慎太郎 諸君 95.11号)

悲しきかな、日本政府は、中国側の巧みな策略に翻弄され続け、確固たる措置も、意思決定すらできない。今に至るまで開発は棚上げしたままである。

今や、中国は、中間線日本側を飛び越す勢いでに、東シナ海ガス田開発にひた走りに走っている。嗚呼・・。

# 中間線日本側でも共同開発

## 東シナ海ガス田 政府打診



東シナ海ガス田開発をめぐり、日中共同開発案にめぐり、日本政府は、中国側が「白樺」(中国名「春曉」)ガス田を含めた日中中間線にまたがる海域での共同開発に応じるかどうか、中間線の日本側が領有権を主張する尖閣諸島周辺と日韓大陸棚を認めることを打診して、14日の局長級協議で中国側に明言した。協議ではまた、日本側が協議の停滞を理由に試掘を示唆した際、中国側が「中間線付近の海域で日本側軍艦を出す」と発言していたことも新たに判明した。

これまで政府は、中間線から中国側にあるガス田での共同開発をめぐり、日本政府は、中国側が「白樺」(中国名「春曉」)ガス田を含めた日中中間線にまたがる海域での共同開発に応じるかどうか、中間線の日本側が領有権を主張する尖閣諸島周辺と日韓大陸棚を認めることを打診して、14日の局長級協議で中国側に明言した。協議ではまた、日本側が協議の停滞を理由に試掘を示唆した際、中国側が「中間線付近の海域で日本側軍艦を出す」と発言していたことも新たに判明した。

## 中国「試掘なら軍艦出す」

中国「試掘なら軍艦出す」

共同開発海域で合意が得られれば、両国は一定期間同海域での境界線画定を棚上げし、①開発費を両国が半額ずつ負担する②産出される天然ガスなどの権利を双方で折半する③などの内容で、国間協定を結ぶ方向だ。ただ、中国側は「係争海域は日中中間線と(中国が主張する境界線の)沖縄トラフの間だ」との姿勢を崩していない。

温家宝首相が今年4月に訪日した際に発表した日中共同声明では、「今年秋までの共同開発の具体的方策の報告」が確認されている。

共同開発海域で合意が得られれば、両国は一定期間同海域での境界線画定を棚上げし、①開発費を両国が半額ずつ負担する②産出される天然ガスなどの権利を双方で折半する③などの内容で、国間協定を結ぶ方向だ。ただ、中国側は「係争海域は日中中間線と(中国が主張する境界線の)沖縄トラフの間だ」との姿勢を崩していない。

中国は、日本側に抗議されると、共同開発案を持ち出して、巧みに煙にまき翻弄した。2007年11月日中局長級会議では、中国提案の共同開発は、中間線日本側の一部で認めるとした啞然たる内容で、しかも、日本が試掘するようであれば、中国海軍は軍艦を出すと恫喝していたことが判明した。(産経新聞 2007.11.17)